古今 茶道全書

信

古今茶道全書巻

宗匠名人之路地庭之事 并書院之飛石付様之事

一 路地庭といふハ大路地よりの事也路地ハ入勝懸ね
或ハ待合を二つ三つ有る路地の道に左右の京を作る皆路地
庭と云ふ其外にかかれたる直に小書院の庭まてこれを用ゆ
又ハ築山をもてる路地ともなる也其所の地形広くして
せまきにもよらん合わせ無躰に作るへし
かん本式の座敷ハ遠近あらぬかねて人ハ立花ともかけ入の
茶の湯にてある程れ心をもちて名大様に家をもつて去
燈分佛具皆をもとくへし

一 遠州義元公之路地庭之事 当ハなを奥に
此庭ハ古人紀割色附と恵林寺祖招和尚安作のよし

中傳ニ有る富士と身延めにて三宮一連つくり有之

② 砂溪石庭并路地庭數寄屋之事

駿河様御代聚楽法下にて銀閣の師匠駿州府中に住居して茶道功者ニ見越の富士と庭巾此砂溪ハ樓しりんハ至て三宮小見立働と名人作と伊賀法師賞美ト傳の根源庭の式法より三宮一連としふるすまかり

一數寄屋後の書院も一連れ住居也以不易常作之之後筆事ニて高楼かく絵られ御建を君ハ排徊セル知る者なし

③ 殿道三入路地庭數寄屋之事

路地ハ有る毛暉横れ山之有る毛暉唐絵師山水高盛と与へ

高の山ハ富士山筆之字ま也へ大形山水多く写して八擬一文残さ山々も見合すり場ニ此路地も擬一色と取て室山と築く是三入道文武ふくろかくぬ事初めて菜た句編もておそかれしハ此路地ハ熱田宮社又大ノ尉と云作是よし中傳くり

④ 數寄屋上段住居之事

御先代　公方様御成ま數寄かけにて堀田加賀守法不望みて金森氏宗和石近之指南を以上段座の緣へ緣迄よう主迄の内采配を直之打ち是ハ永棚住居の富也永棚乃莊つま多くの道も數式法も

一御成庭ハ此座敷をくらる極也木る事前へ路地

ことを根なしすかしにかなひたるありまつ大木ハくろしかう
す甚だ見たるすこしよ花植ることも棒杭など数ぬるく
内庭ハ白砂小濱形小石の交わらく打合せ据置景石の
数と目出度して根笹をさいきなどの數がありしらい
四方にはとしてこれやうめてところけ抱けあきれふす
此中に遠景也諸壁不書院を上座りハ二畳かこひあれて
ちかる小書不ある人し外に書不正さる也

五　南都与抽路地之事

首目与抽と云し人耕作と業とし農にかくれて茶を
とのむ細川三斎公利休押懸して茶を云あり由世に
人々に伝る花石なとよハ大木を引切て多めて小形なり

てふのふものこころあると符数寄屋前にしつらひたるよ
し多分色りくてうちまかせて俗なる様一風流なり
路地庭又何公の住居様様の抱数寄時之家造作を
國家ありて茶器ハ古瀬数寄者ハ釜を古釜とぞ云ふ
焼物くよろせきを云ふの釜にて与抽古釜とて名物の数
まちかへたりしと云子細ありてところひすもしとなり

六　紹鷗之指図平野路地之事

此住居ハひとつより揚縁より書院の縁迄と用たる住居之
路地庭ハ三州八橋の景気也其八年程とか不ても思ひ
此住居ある八八橋の様小庭に誠に略してかるき数
寄一入心深し則路地庭と書院の庭よ用てあるまじき

の式法に合ぬやうへしかけ世様に用ゆる露地にハ分別
一景露地に小侘なる所作へし根本に地の写しを用
なき庭よりハ見るをまなひかたき事なり

⑦京極安知之露地事

紹鷗之露とも以てうつされたる露也白砂にて敷寄
庭とりハ此土極物を唐竹名竹多くに合竹一たに
用らもし流石乃京極家の法乃麗縮庭様
とも築きて庭也飛石の間を七ツ五石の珍はある書流
乃庭も松竹梅絶蘿なとを用られ何も京武之作法也

⑧加賀肥後守殿新宅之露地なり　江戸御屋敷

露地庭并飛石何も小堀宗甫之作おまし露地に打ら連

中戸伝て二重絶蘿の二石松乃合せ本式の露地庭銘
本山茶錆生たりとて人乃方々ハ何とも写にて用之
其外石橋柱の形之あるも流と用て合せ古今珍しき
前多く其流名高き露地也橋柱ぬき穴のあけ振口
伝成ものよまはうつもらは

⑨古田氏侘露地庭之景事

此露地とて広きにもあらず様にも大路地に侘りかくれ
なかの作より不均常之の様けはしも別露地のうちに名
高き侘茶人露地由きなりて家宇多く見え物多くみえ
中ゆく此式本法熟奥なるもちて来ち工夫すべし路地山
石築く庵ハ露地ところ也一書流茶の庭飛石よ七ツ乃岩

石あり略て記之

(十) 小堀氏作路地庭之事

一 纒かけ路地とは地どこに大なれまでとうつしてかと飢しき
りやうに路地道の池へ趣して龍池と称し此式よへ
水あり飛石流延石とちんぢやうにて水不見へ溜よ
おちつき後世とれ格式也囲茶席露地にこのみ
不一入地数寄之一囲内住居別に記す此囲ハ四畳半
堂古之堂古手茶別に記ス 一宿の天井まで中まで二尺
四方あけよふらくかざりの風致あり風致の時節あり
丸時まハ鉤香炉釣り摸すとあり 半鐘と松よ他
らきたりすとも

(十一) 利休侘路地庭之事

此路地庭之外に山城之内山崎妙喜庵に路地を利休
作らて今よ残りてあることの指南と写したる路地を
も皆小路地まで写ふ写し家氣なし此写ハ大人の路地
かもらりて写しからんと思ひ撰てちよあるかに利休
か大徳寺小その寺か路地の風を取ハ利休の風流をし
そのおもむけよ心と付えふべし 何偏泉州 堺うハ利休の
遺風路地数寄住居にも残り掛物あもとも時様抱瞽
其時代の侘を称ハあれども 枯錦より写してたり
そうち後の世まで伝へとなりの方にあそこれ他格式
を集めて記ス

(十二) 酒井日向守殿露地書院庭之事

逸窟と云し人ハ利休か弟子之東ニ下りて茶湯を広し
有之大人ニ見へ露地数多築たりし統中酒井日向守殿
江戸大火ハ邸前ニ陸奥之沖の石の景を露地庭ニ写す
千代絶りたる景式にて時の宗匠達も感賞ありし
又書院之庭ハ泉州堺数寄屋大工和云濤とか云の珠光
法師か山水末伝聖りの也去ハ此千庭砂漠形加筆系
絶也松竹亀蓬石祝義二当る鎮奥ニ築たりと云て
うゑやうる事にてありて今ハ庭景也

(十三) 越前大守露地庭之事

此露地ハ大火事以前お越前之大守の露地にして泉州指南之

山水ハ泉州堺か大子屋宗勝茶屋を云ニ古人は数ニ分
て宗勝指南之珠光法師山水之伝受と承術られハ本
式之山水玉澗標西湖形乃やうしと云へる泥形を写
形也祇池の格式を本式乃庭形之凡露地形ハ東山を
以茶の湯世ニ広まりしより後の宗匠達か露地式又湯大
人之露地ハ当時の宗匠ニ至人乃法を考へ其後之の事
知抱別ゆゑ先達を筆じ川ゆゑる他事かれとも句編
之深聡也

(十四) 一柳氏露地骨之事

江戸大火難以前之露地之骨也東三河乃隠士林宗安
といふ人ハ林狼之飛孫之其流せし時分ハ茶道修行し

深草より遠州とよびて其の侘禅みし茶湯と号せし
一柳氏所らるゝ小由る世代路地書院おの庭と築く跡
数路地あり殊に路地ハ小二王石よ石灯の松と名合た
此作ることの露かゝすゑの称ハ様式ことの形あり根本
茶入名物よ様式と云かくことの語にて其の称する
名物もの則東山殿代よ様式との名物称の名らに是も
是式法めて都よく称へ平庭南天の松植也平水所
沢あいしらい花垣の佛石も鋳て見る事あり

⑮ 町市之住居利休指扇路地之事

昔日坡にて利休乃指扇也と合せ陰奥乃尾修の男と云
院の殿の山水よ写されら古跡の名所の名額ともくく

而已に露京あり而く名所旧跡をのしらへ是和かな小徐
し又ハ都へもち名跡ともうされて風景ハ山水へも加へ
まうけ格式も其かハ名平比称する永路地也京に
用ゆ計り也

⑯ 小堀氏作路地之事

小堀氏ハ其人の宗匠ハ御道に織り始め古地と云う
茶の湯小事もり極又山名にて離宮の形ともうされて
其よな武の山水よハあるすくへ是の名所の庭けて思入
殊勝よことにかゝめつしく築きてと賞翫すべき也
路地様子を仕居のよく侘様をもちかろしきハ名合也

⑰ 藤庵作数寄屋書院庭の事

此書院庭ハ御成庭の格を以築之
一 称山水と云ハ釈迦御誕生の法座石を表としたり
其時生湯九頭龍王八功徳水を出し釈迦に生湯を灑
給也 是滝の始なりとかやまた八滝之落様九品ニ
一 布落と云ハ布をさらしかけたるやうなる落滝也
糸落と云滝ハいとの乱たるごとくに落る也
廣落と云滝ハ滝口と廣左右へ滝つぼまで廣
みて落る也　一 重落と云滝ハ流ニ重ニ落るを
一 青苔石 山の腰などさしはさみ立る也
一 寿命石 脱言石之おの濱渡に立る也
一 冨貴石 前の濱槙のそばに立る也

一 めけけ石 濱の洲崎に可立也 一 対面石 庭安
れおおよふすへし 一 月宿石 汀廣所の中に可立之
一 志やうかう石 ひのくのうへ 一 虎臥石 虎臥野延也
可立也 一 通天石 無是橋なき時ハ日光石月光石也
一 三尊石 此立所ハ向山のうちハおの濱にも可立之此石
立時向泉酒とも向て清浄にして可立也
一 主人石 脱言之石也 一 水門石 中島橋のおさへに立之
一 亀石 汀中ニ可立之 一 鶴石 濱波のきハ亀石に向
て可立也 一 水分石（浪分とも云）滝坪ニ向て立之也
一 無名石 河底ニ可立なり 一 鏡石 滝の脇に立之（滝ハサミノ石トモ云ナリ）
隠三石之事

一病石　石のなかゆがみて立たるをいふ　一死石　立てよこたふる石を臥せて置也　一貧石　石を一ツ所に置ずして
いかにも石の間数すくなくして石のかどをよくへして尾とは
河ま(へ)して伏せべし石根を深く埋べし浅きは悪かり

庭作り様之事

九山八海といふは本のところの時は座敷の面を海に作て
岡より築山と為也当人の島は了山を左右に築也
一三嶋一連といふは手前を蓬莱方丈瀛州也
一庭に荒磯作と云は山の裾の景色をあらくと作て
築山より中ほどへ流済川下迄石を立て根へ深く
入て可立也　一治水作と云は河をとせず出るの様に

作也　一築山作と云は高く築水落て河下に池
あるところより湖を作出水へ山と海とは陰陽也
一南面と申は南に可作築山と辰巳に置て西へ河下と流之
一西向の庭の時は東に山と成戌亥に作て河下と未申へ
可落なり　一石を立るに鶴亀の方より立揃へ
むかふ石と立るは三ツ二ツ宛つり合て可立之極も青赤色
黒又は立川より白石赤石多く立べからず
一三鬼毒龍石と云ありこれすの守護神烏芻沙摩明
王是也　一野筋と云は石をは野にて立之海石とは磯ぎわに立之
山の石とは山おくに立之然共山の石は河磯辺にも立之
海の石とは不定で山に立也　一草木植所又七五とて植之

一杜若石竹なとハおの〳〵石の方ニて植也
一竹ハ前石須弥ちかき所ニてハ左ましてハ右より下植之
山水築山ハ天竺霊鷲山より震旦国かんひ山ニ渡て後
我朝用明天皇の御宇宗治之年等持院ニ作始る後
故ニ東大寺又ハ興福寺なんとに深作也
一日本庭ハ瀧山ニ三尺ニ落る事ハ直て作也　一河源事
二尺五寸ちかき深く立て作之　嵯峨流築流之所ニ一つ立一秘之

續石之仕様之事

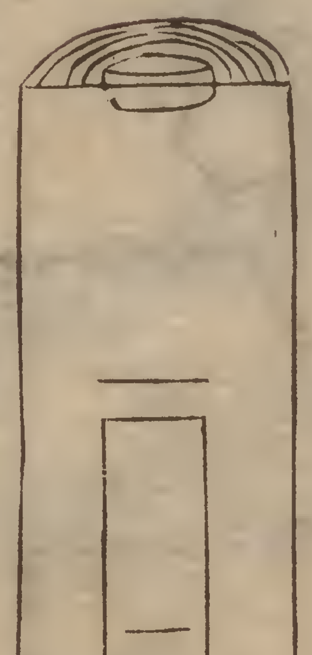
一小石ニても数石数多集メ下地の所を能ならしてつき〳〵
根を上へ石を付様ニ土ニ当て二寸さかりの苔を根笹
しのふ草のさらす根ニてうすく植て後ニ仕様流之第一也

路地打土之仕様

一石灰八升　一塩四升　一殊之土壱斗

右之合唐臼ニ入ふミ一返臼ニかけ又臼より入こまかにふるひ
かけ極末臼ニて油又鉢へ塩二升ならニ升之臼へ於て入
抽そろく搗つきかけて後何も打土合たる時唐臼にて成
練つきにぬりたれ也
木口ハ先を浅めて中より石の深さ七寸ぬき穴あり橋の
ひつくりにむかり二寸ぬき穴の長さ八寸ほそく二寸七分

橋柱圖



一駿州義元公路地庭之



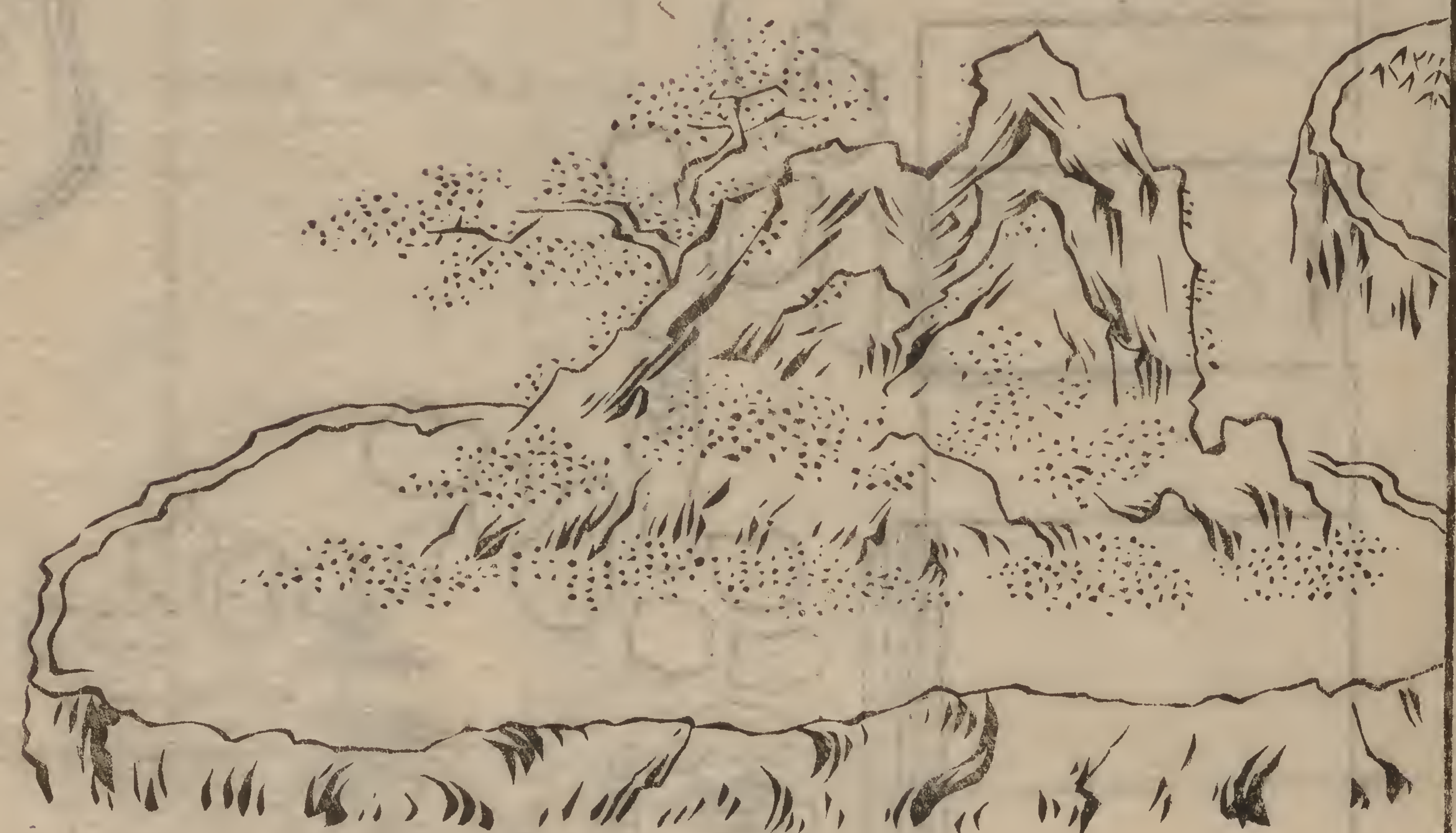
其ハ俘祖栢和尚之後住寺與シ由聞之



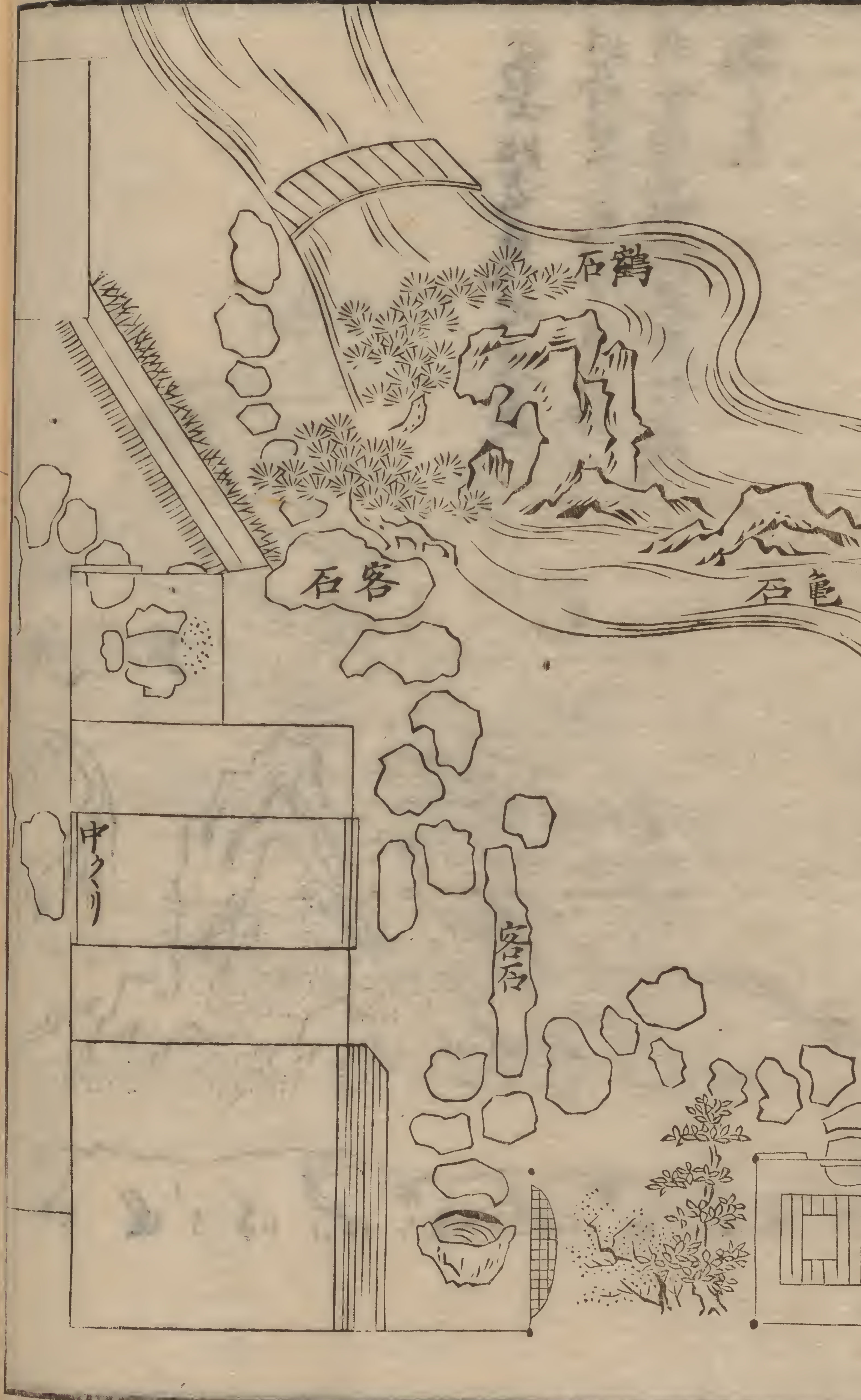
義元公之書院庭

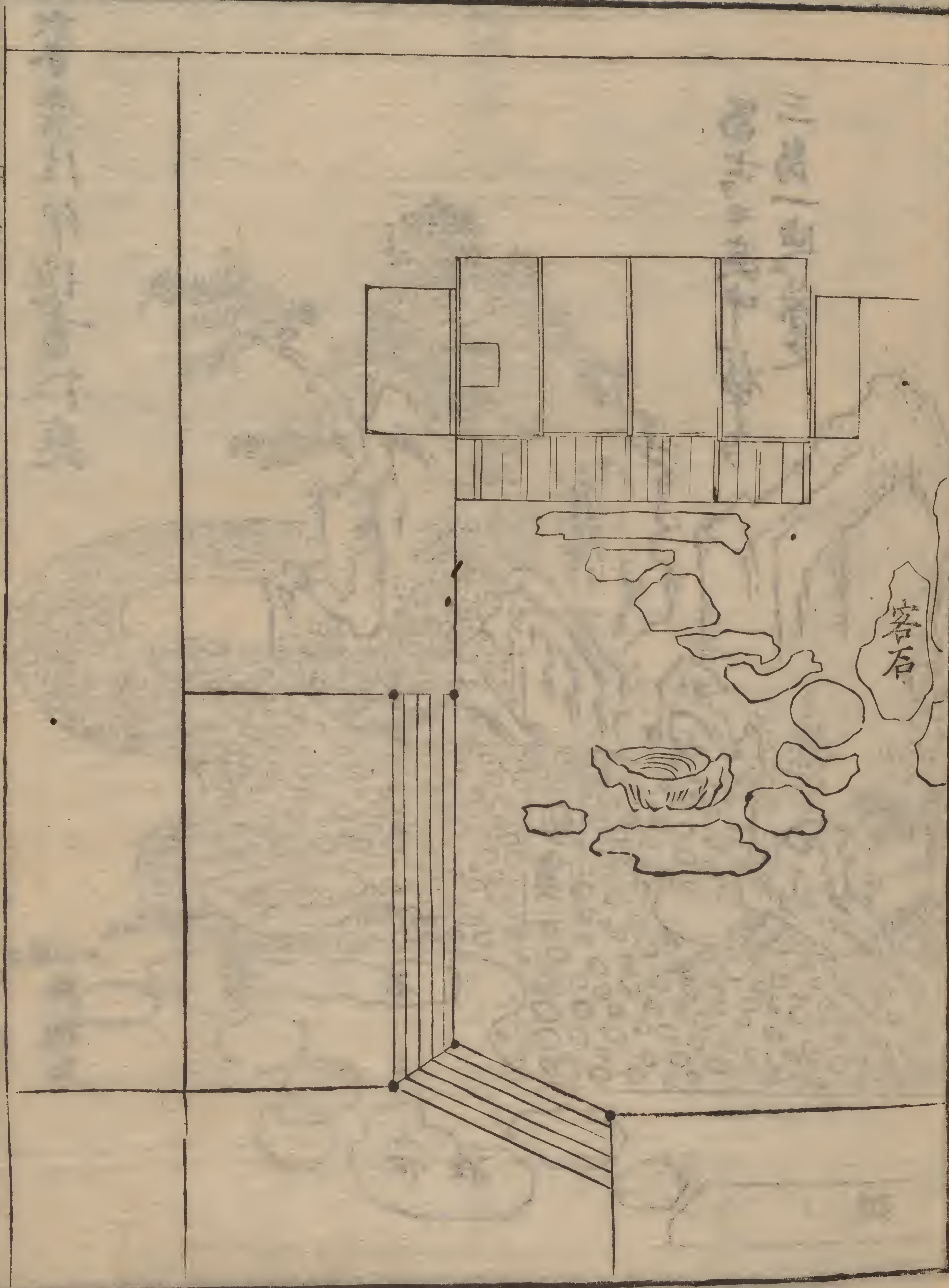


富士此方ニ見ル也此庭
以外景氣可有之於
共古跡ノ圖ノ必大石計残ル
圖多シ



二豕樂法下化露地
數寄屋之圖



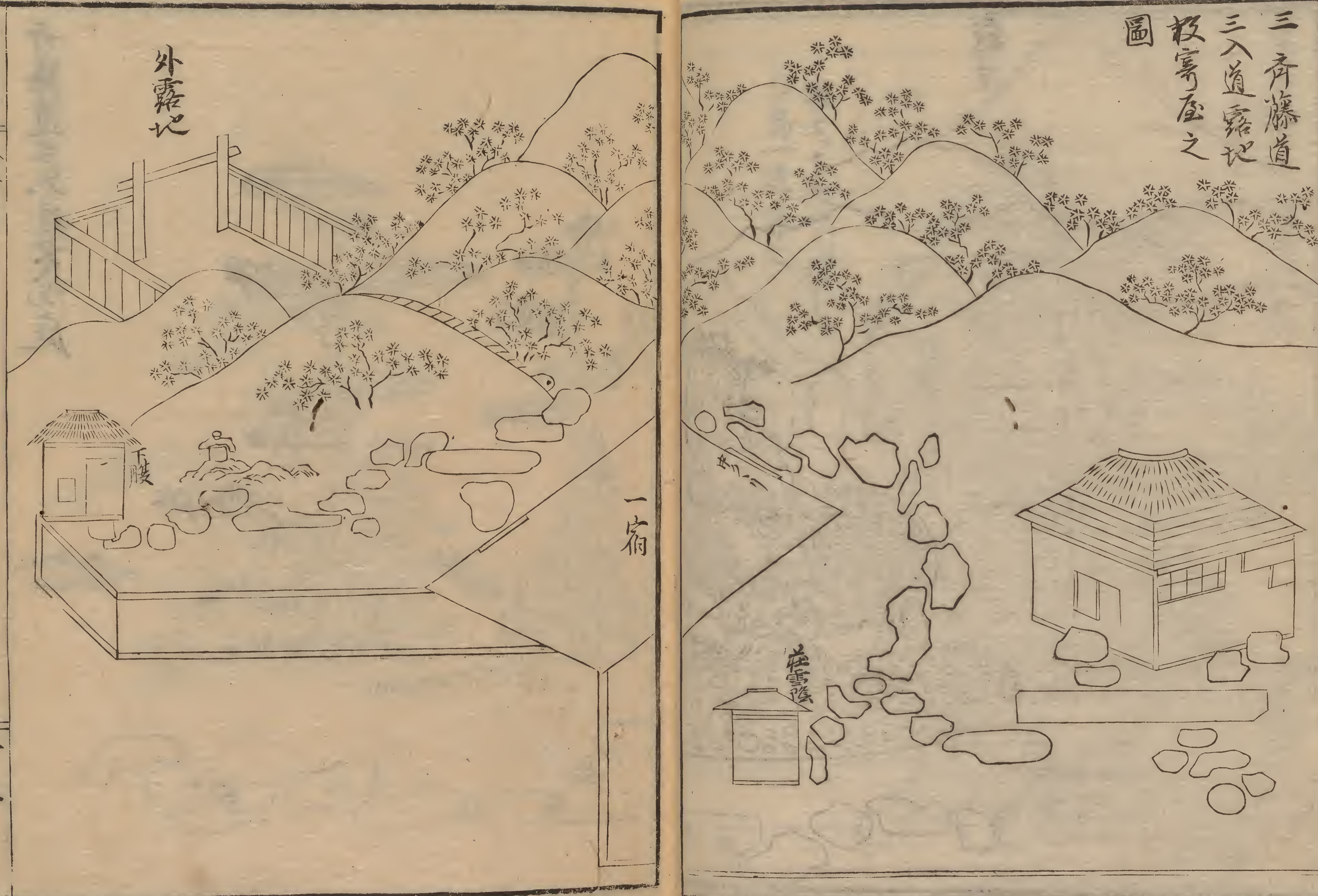


聚楽法印作書院庭





三斎藤道三入道露地数寄屋之圖



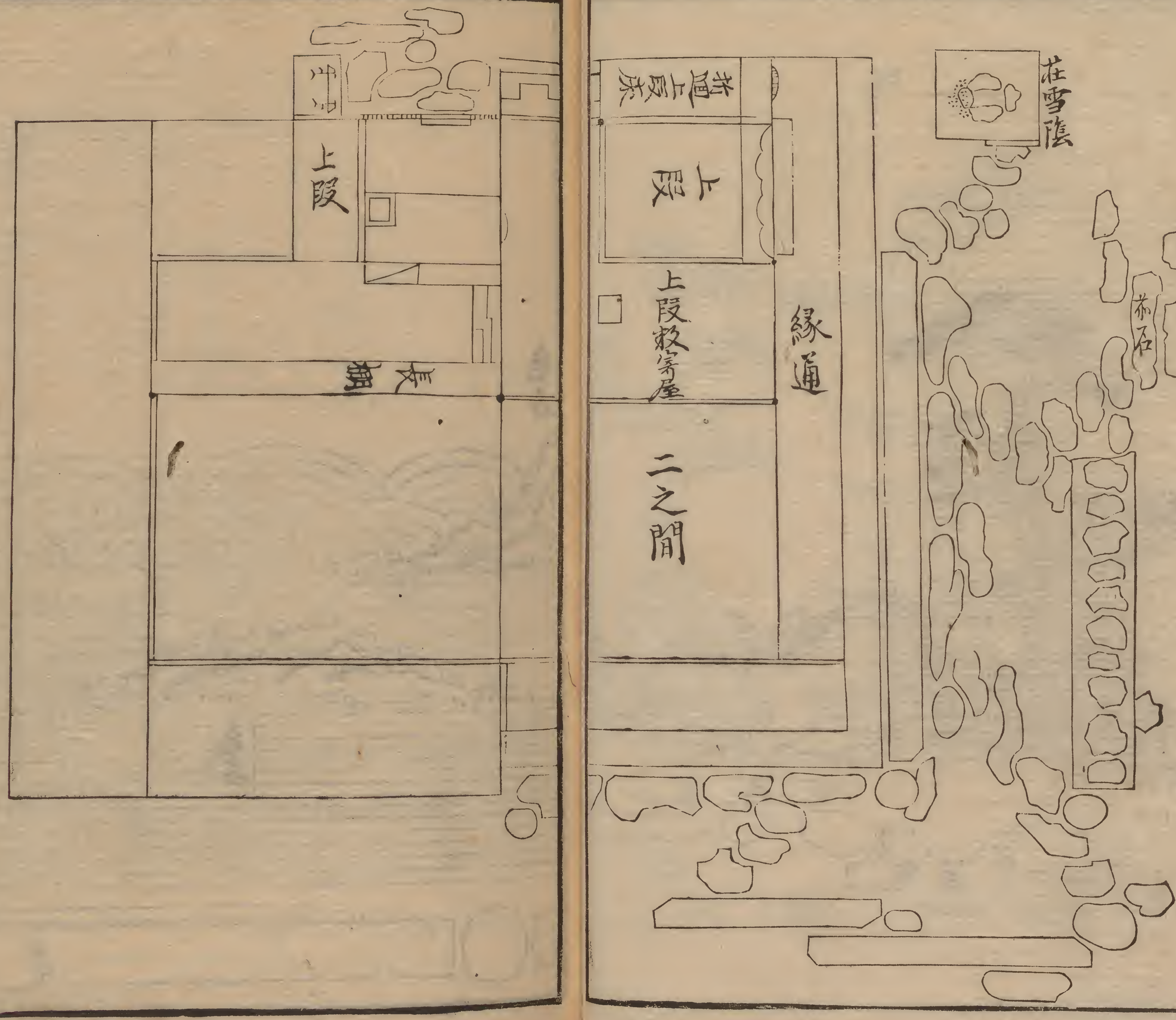
斉藤道三入道書院庭



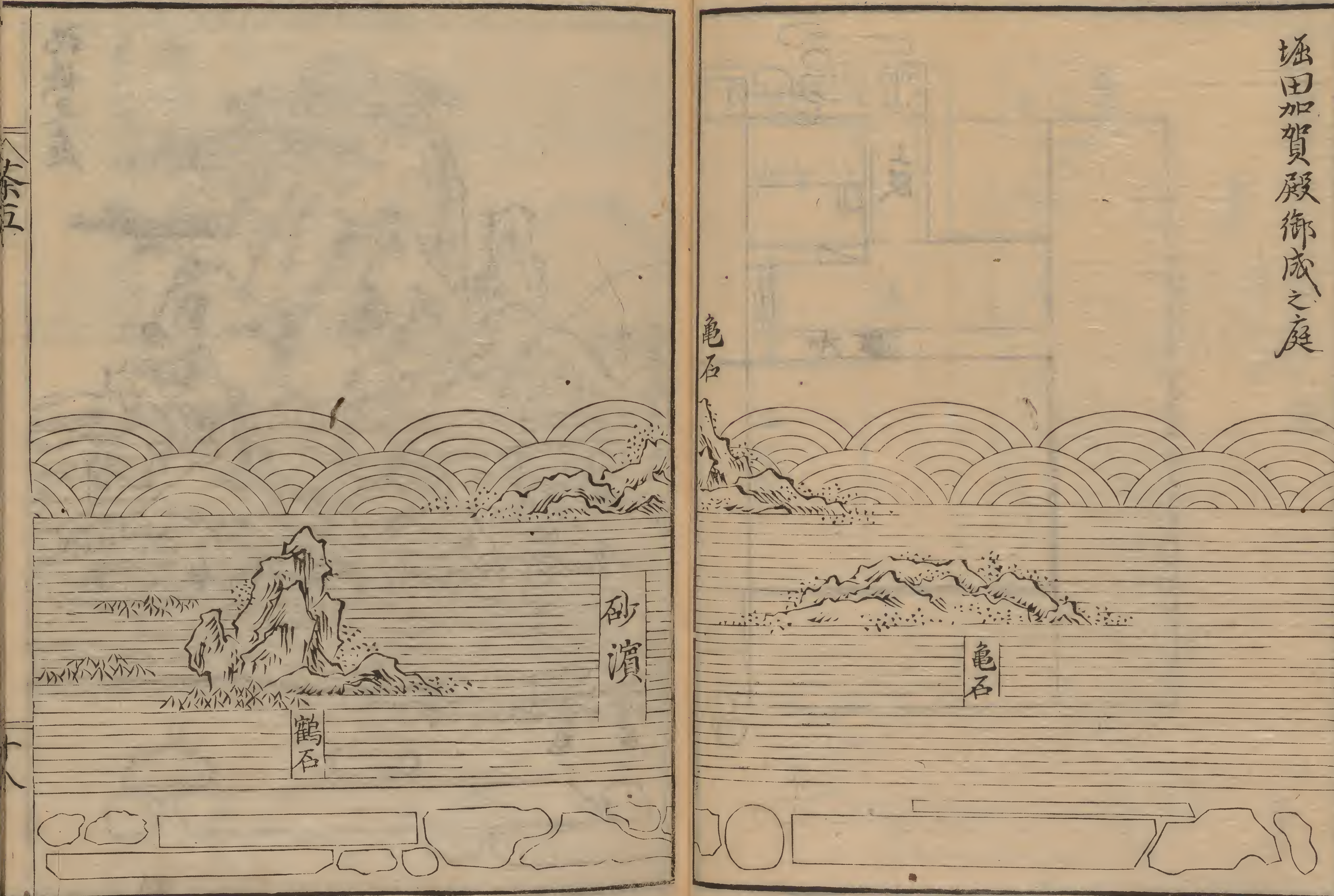
右松竹平庭



四 數寄屋上段住居之圖



堀田加賀殿御成之庭



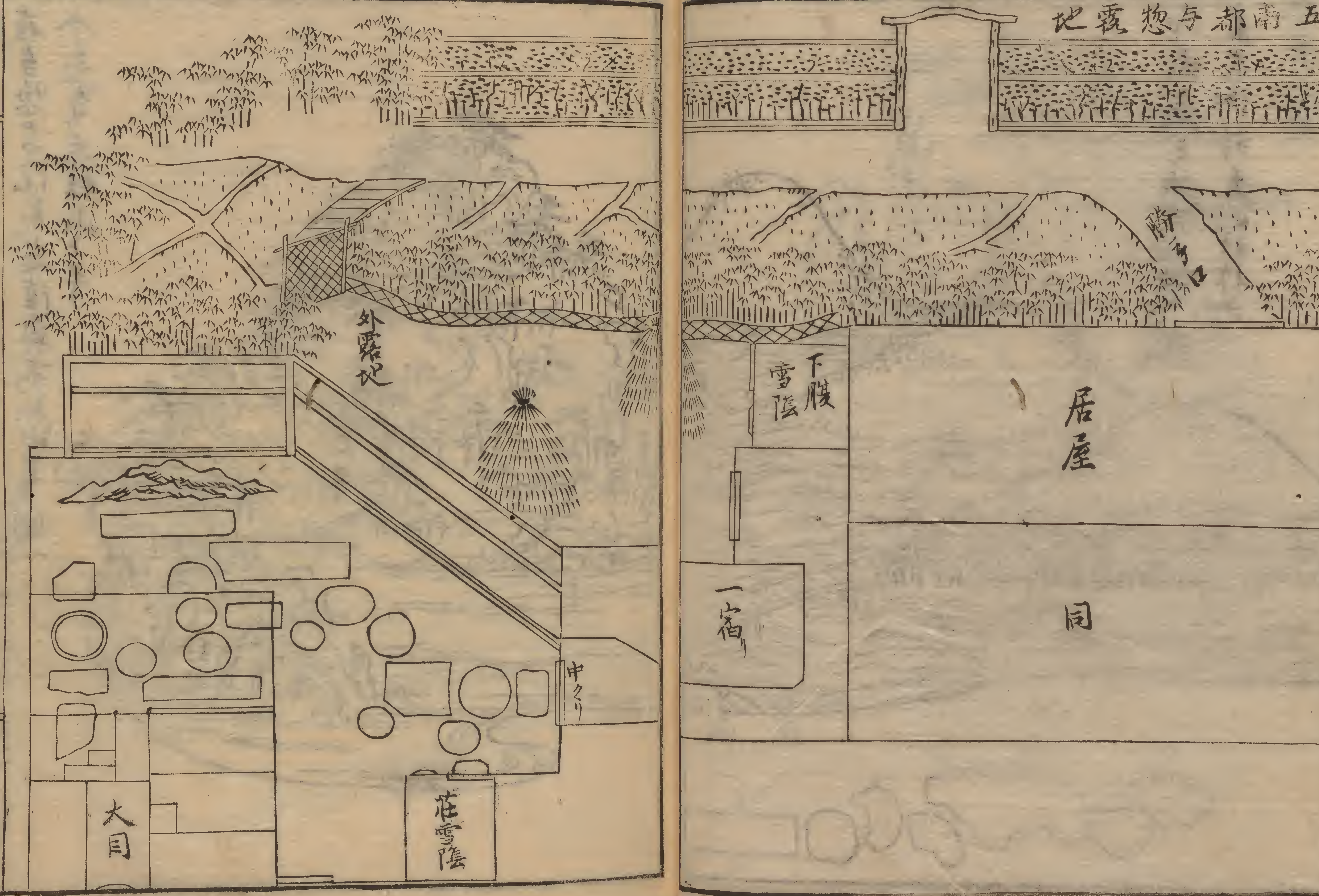
祝儀之庭



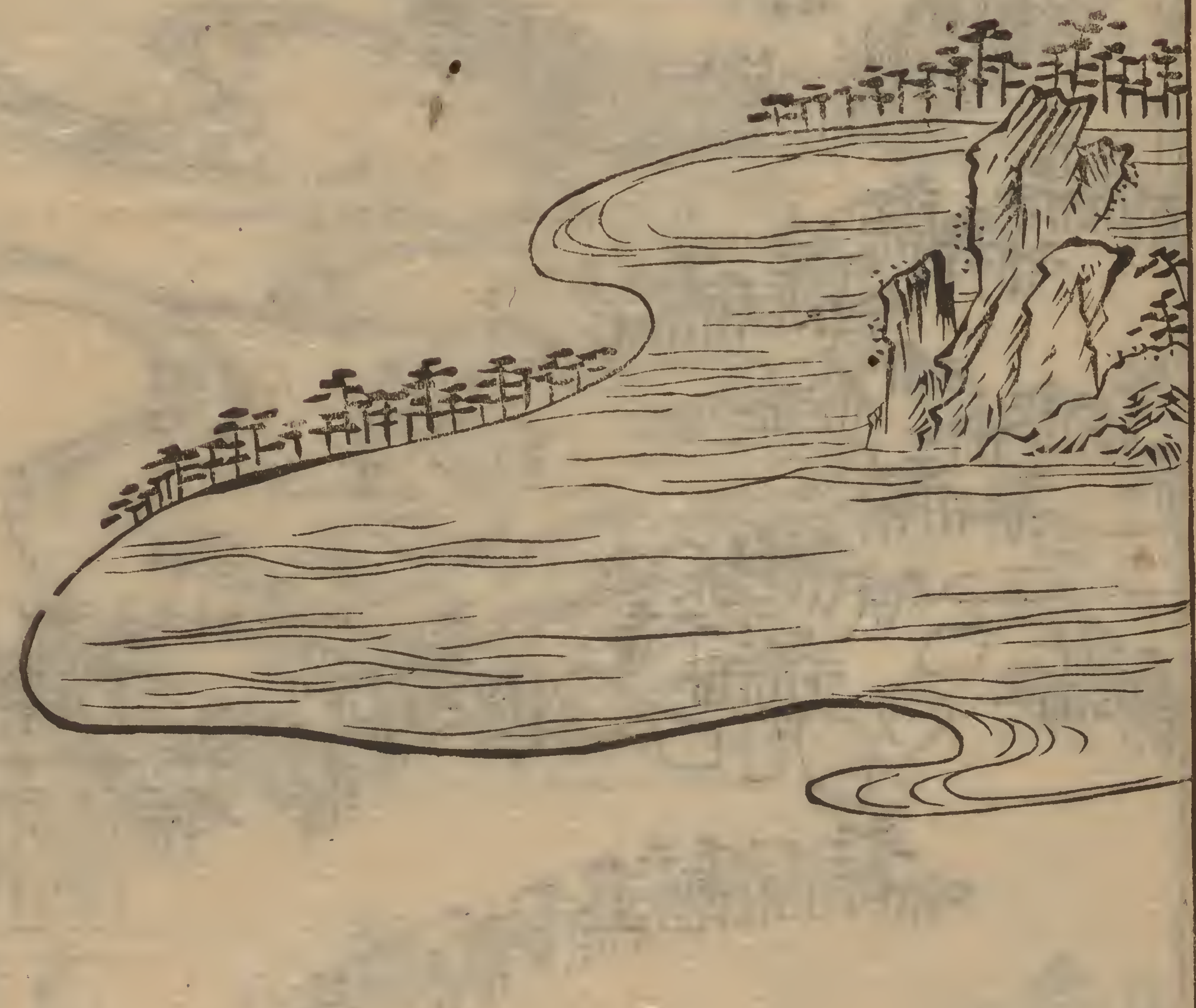
御成庭之格式如前圖
若有御好者如此作之



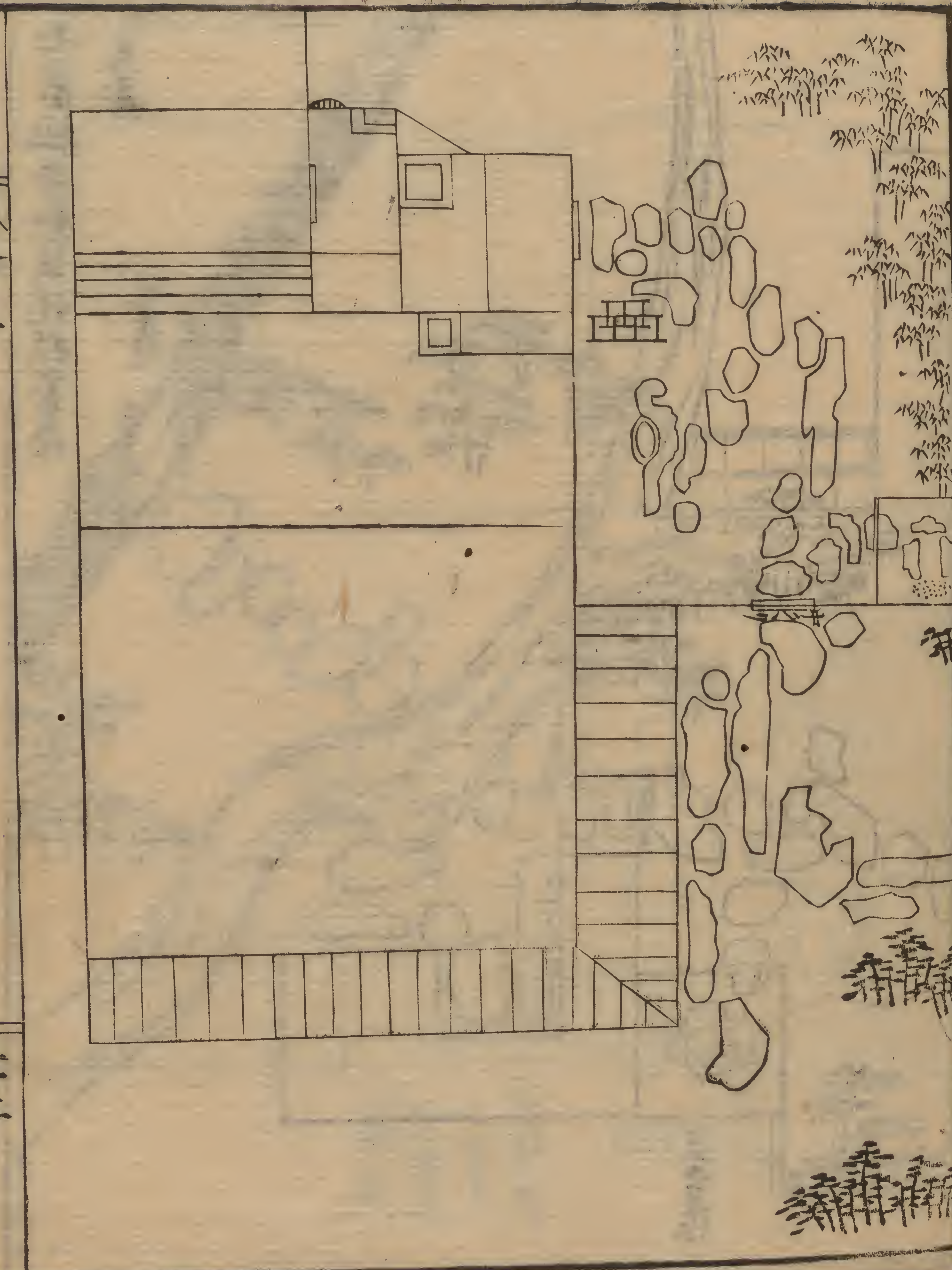
五　南都寺惣露地



右与惣書院前ノ庭陸奥末ノ松山写セル圖
今為寺ト末ノ松山ト云ヘリ



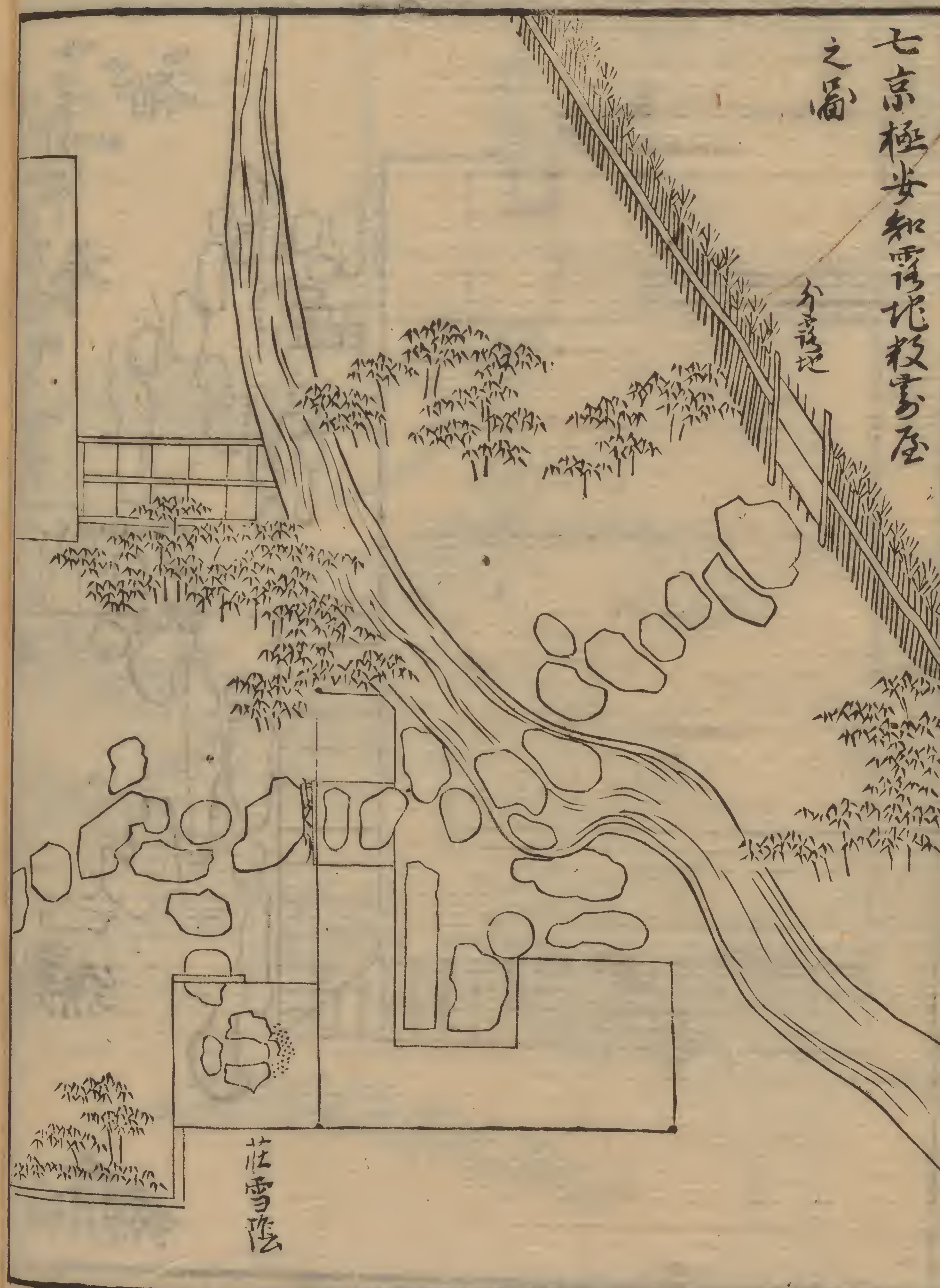




六 紹鷗之指圖 平野宗地




此庭有七ツ岩石是ヲ号ニ七賢石ト

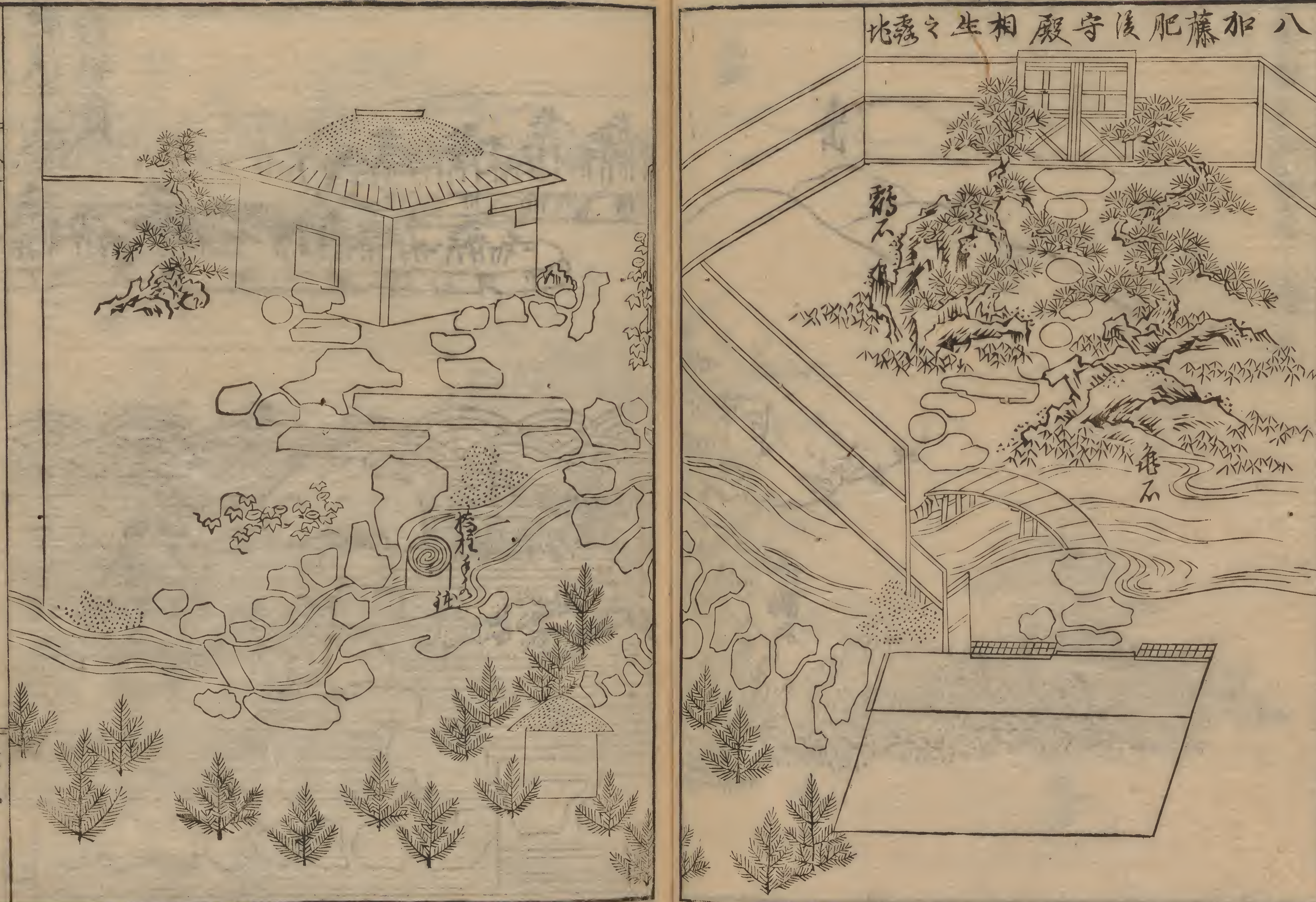

七 京極安知露地数寄屋之図
外露地
荘雪隠

京極安知松并梅庭





八 加藤肥後守殿相生之露地



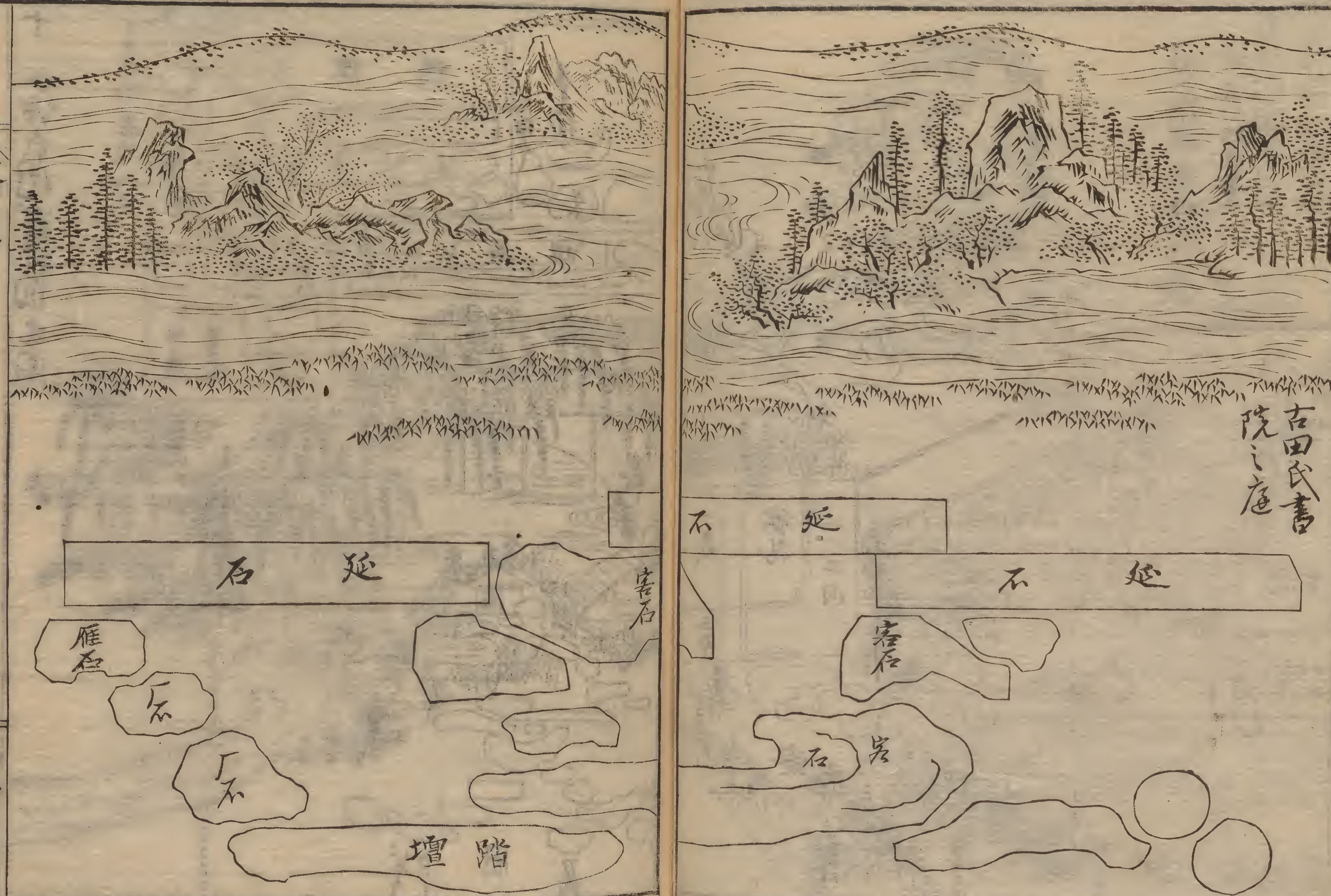

肥後守殿
砂形庭

九古田氏作ル露地庭之圖



圓住居雪隱之圖
各見於畫




古田氏書院之庭
延石
延石
客石
客石
岩石
延石
雁石
踏壇

十　小堀氏作露地囲之圖



小堀氏作書院庭



十一 利休作露地庭



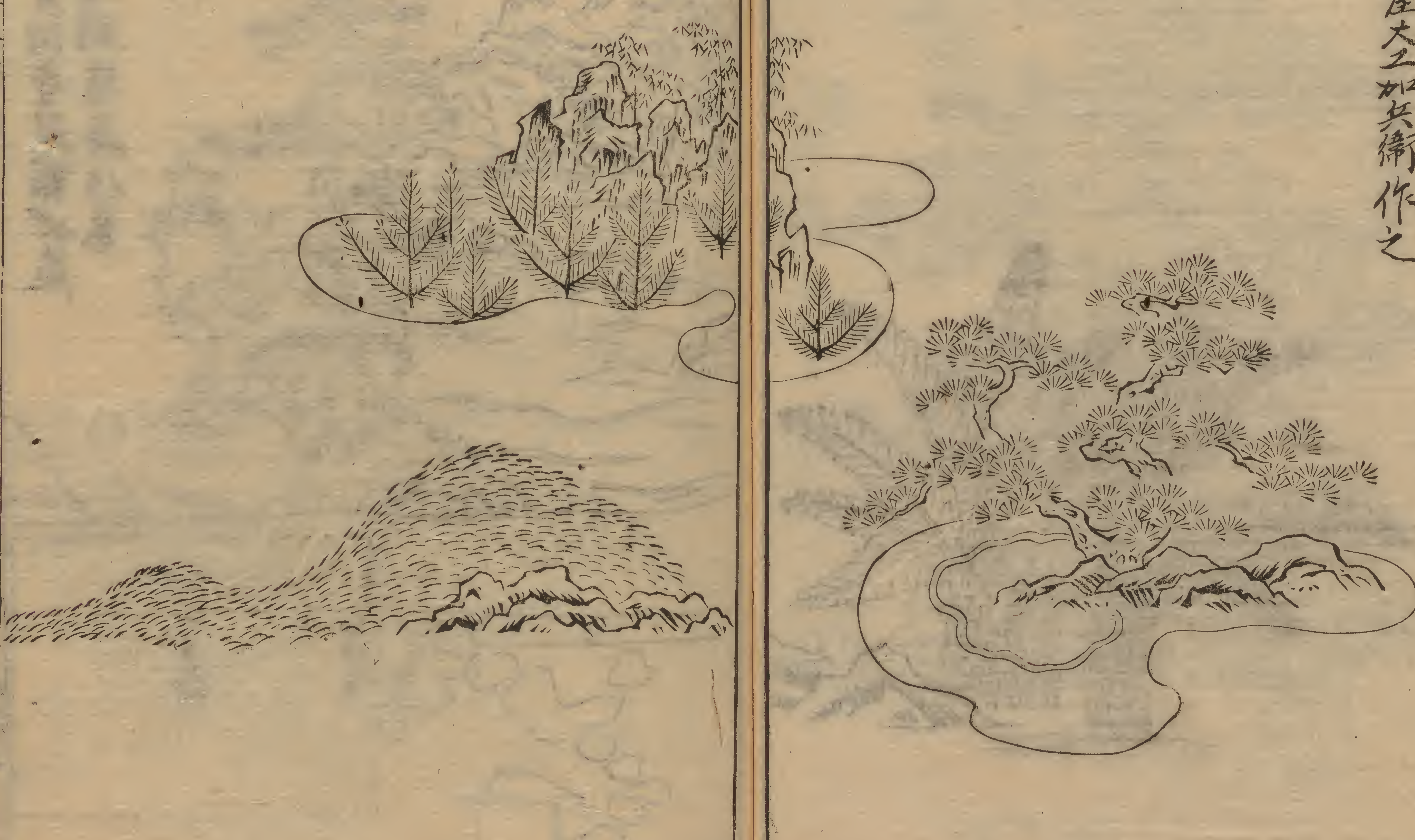
利休作書院庭



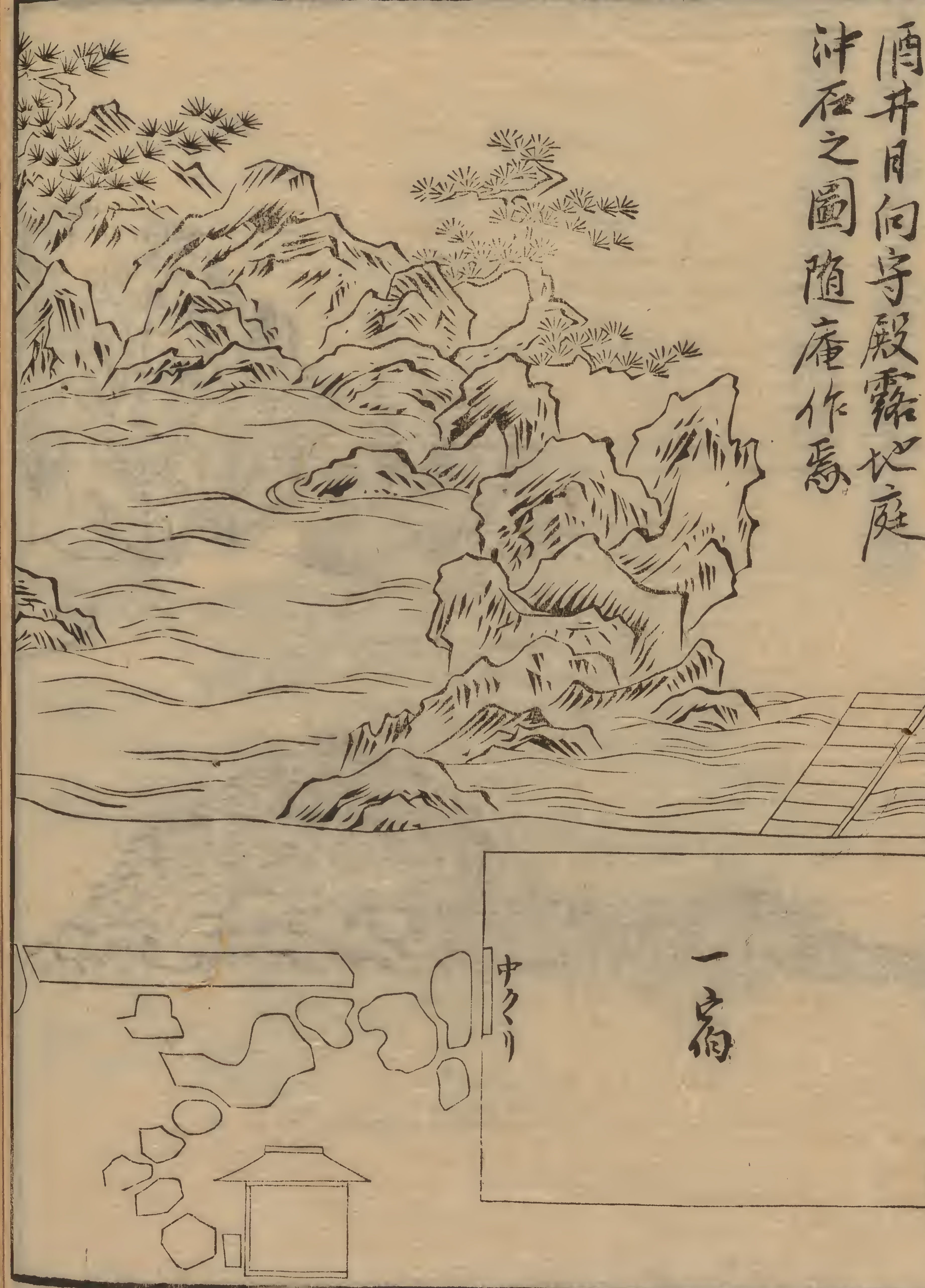


十二 酒井日向守殿庭圖

數寄屋大工加兵衛作之

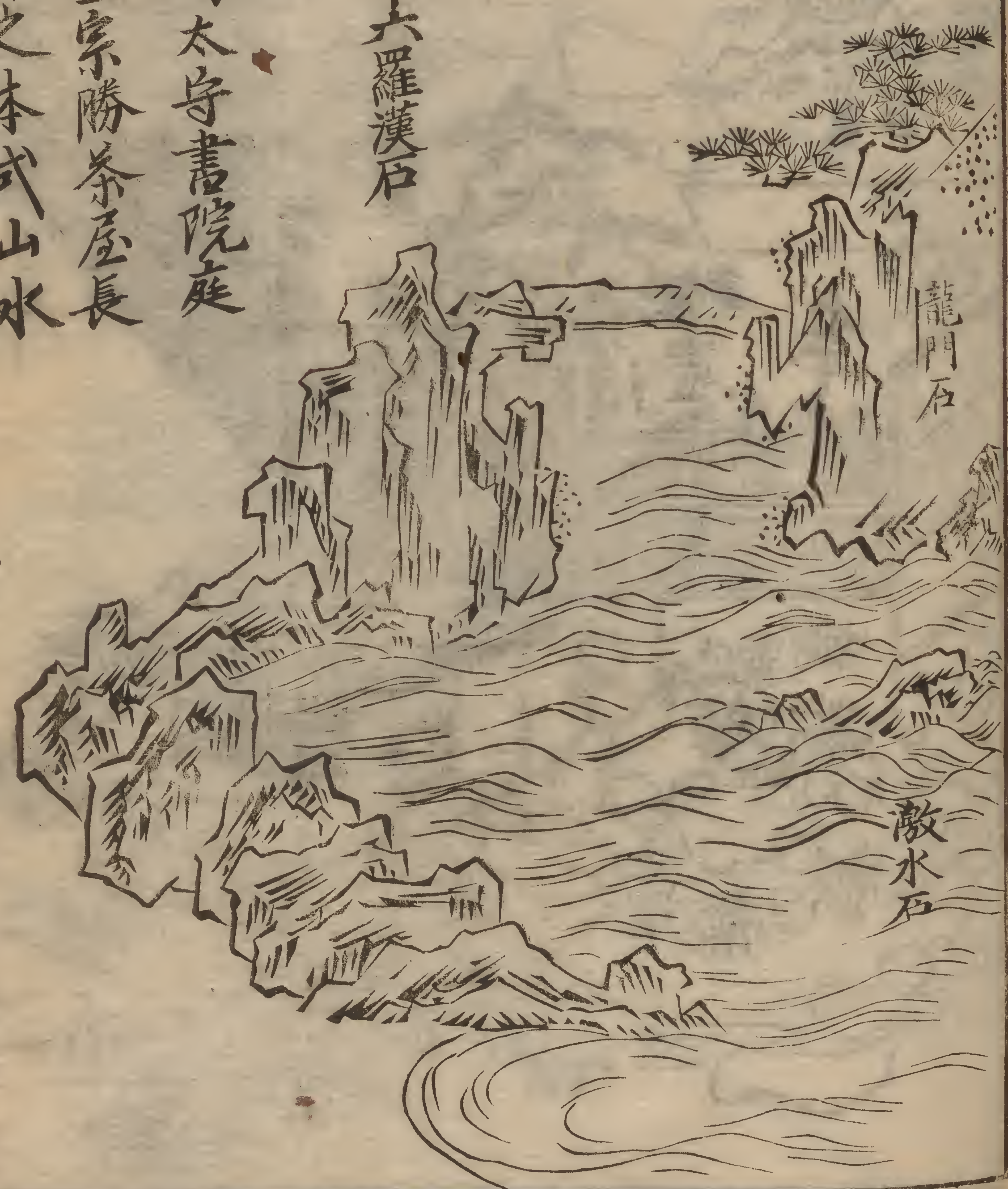


酒井日向守殿露地庭
沖石之圖隨庵作爲



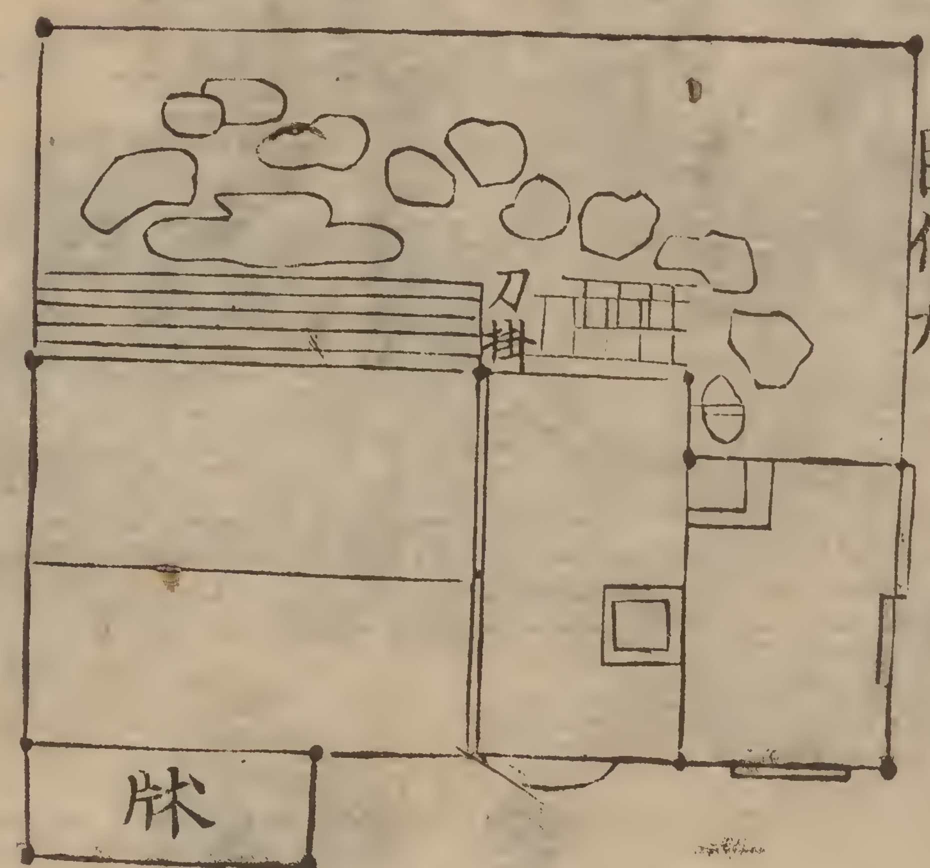


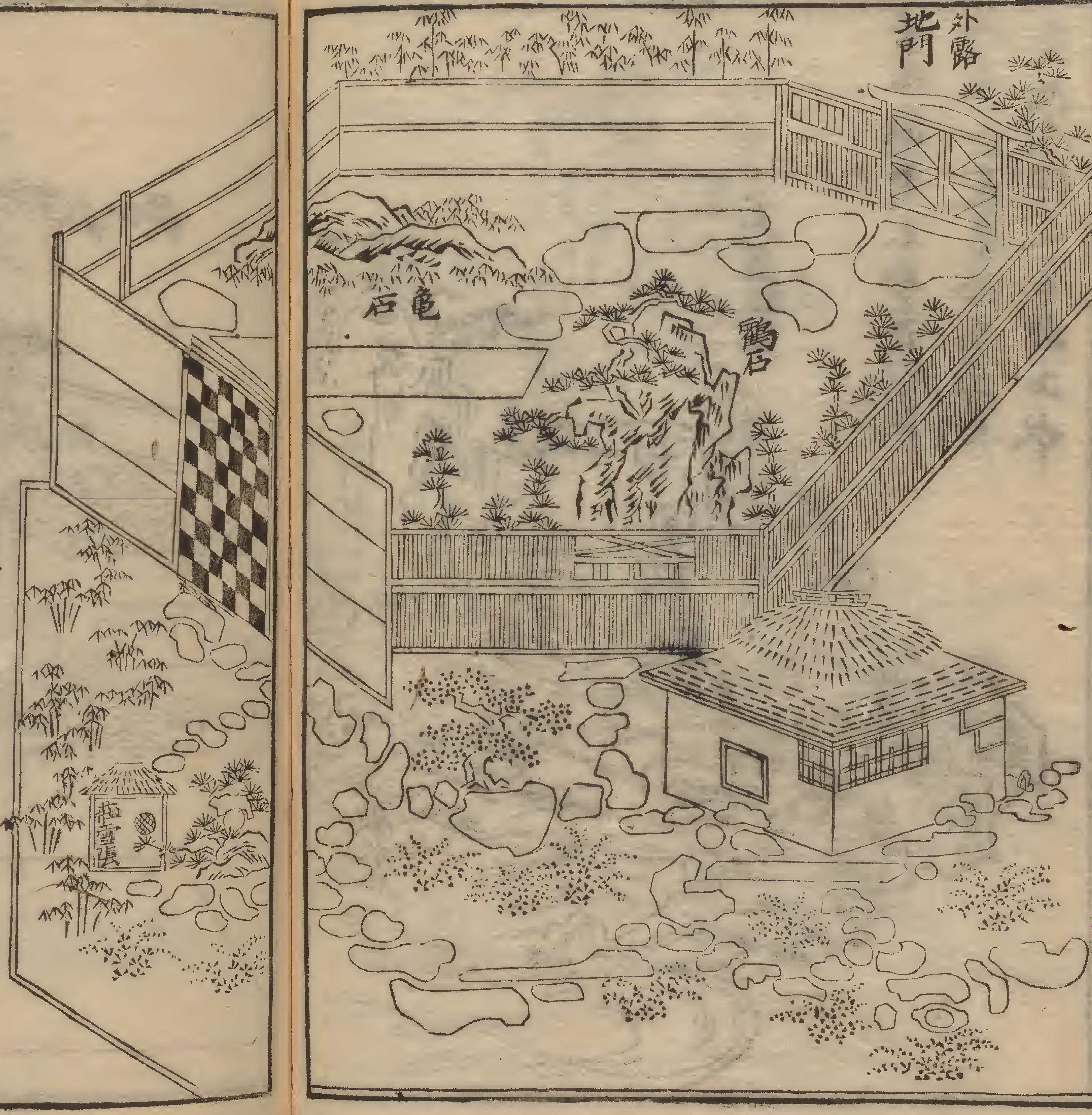
十三 越前太守書院庭
堺大子屋宗勝茶屋長
意両人作之本式山水



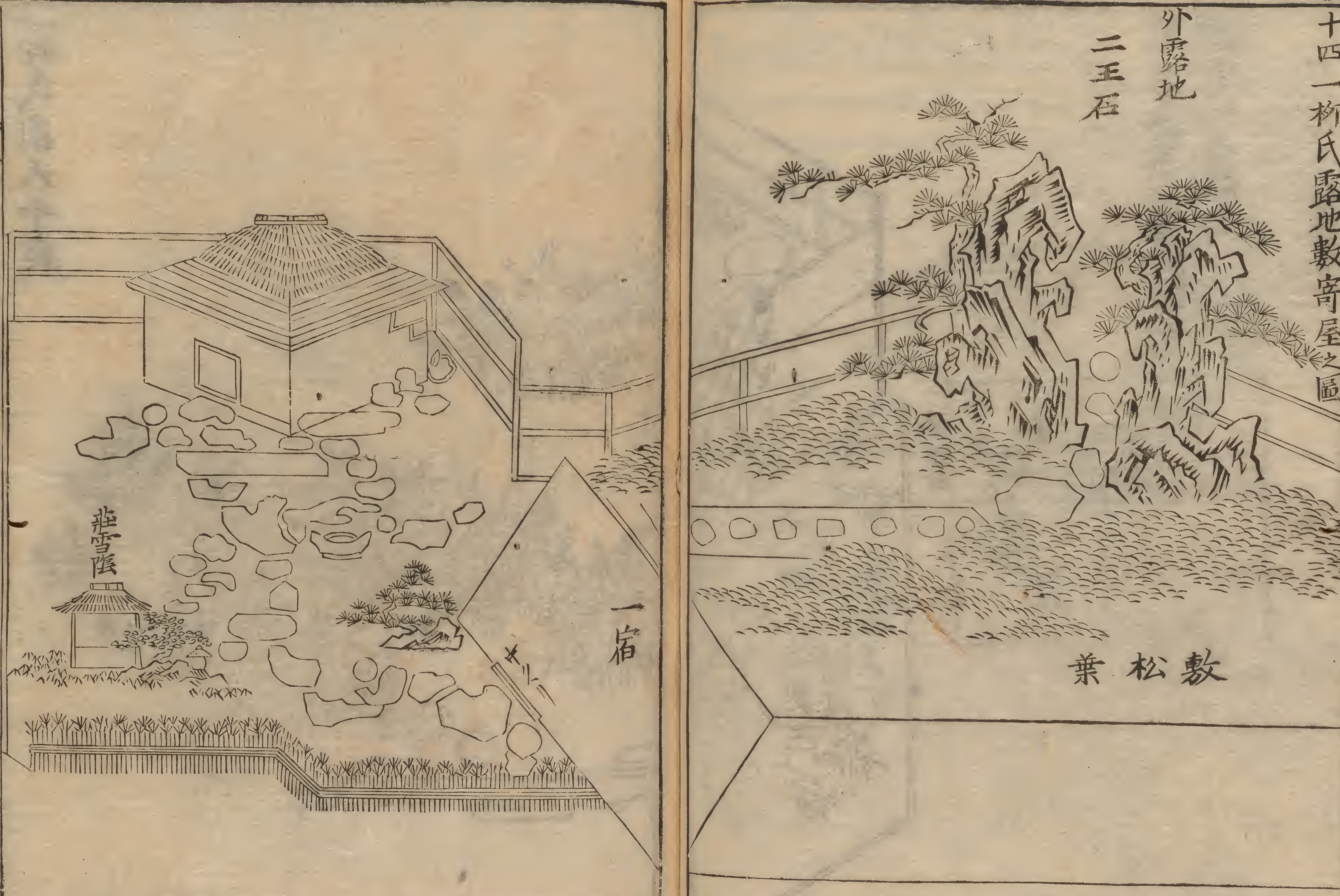


越前太守之露地囲之
圖遠州指圖也





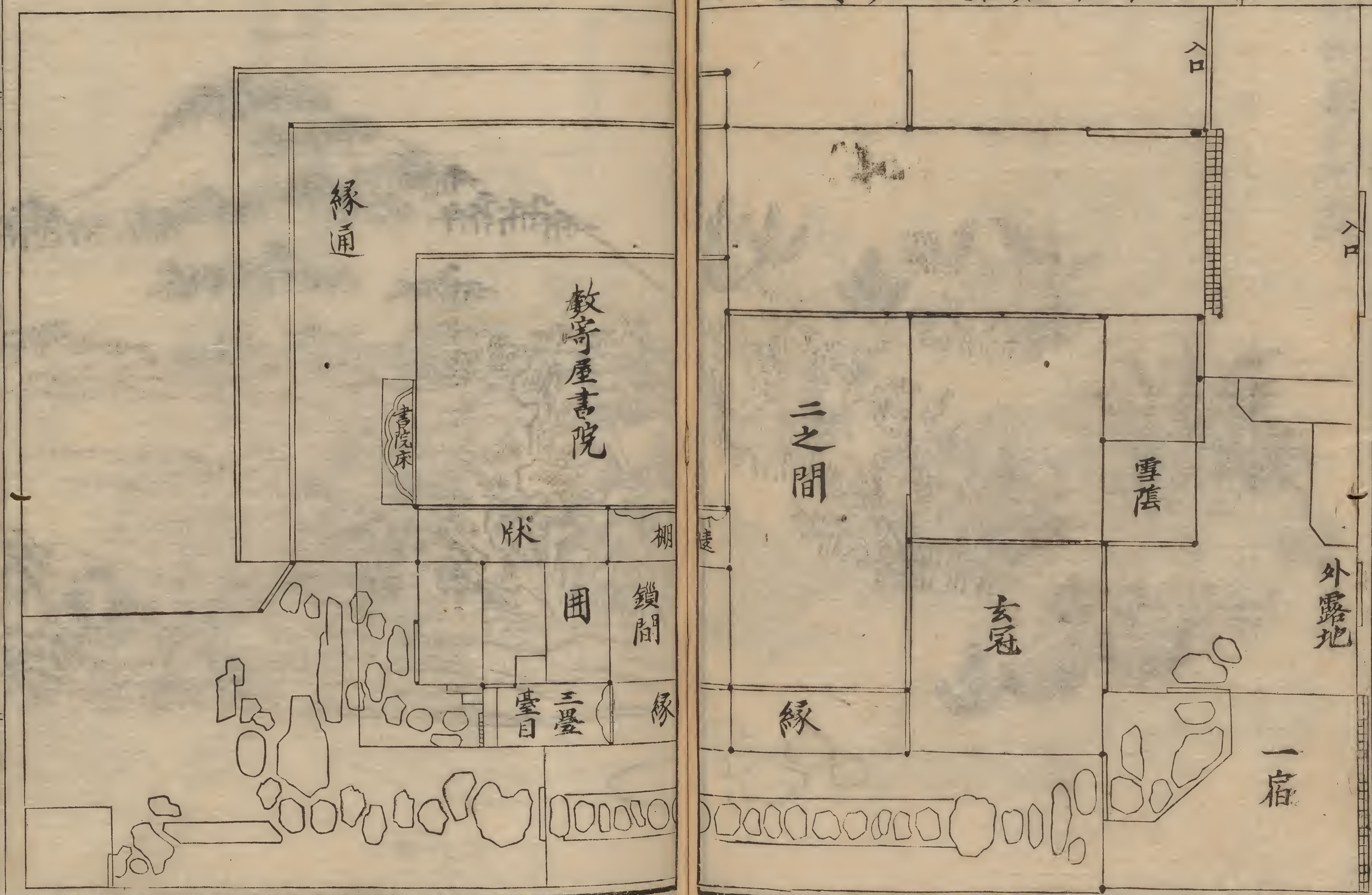
十四 一柳氏露地數寄屋之圖



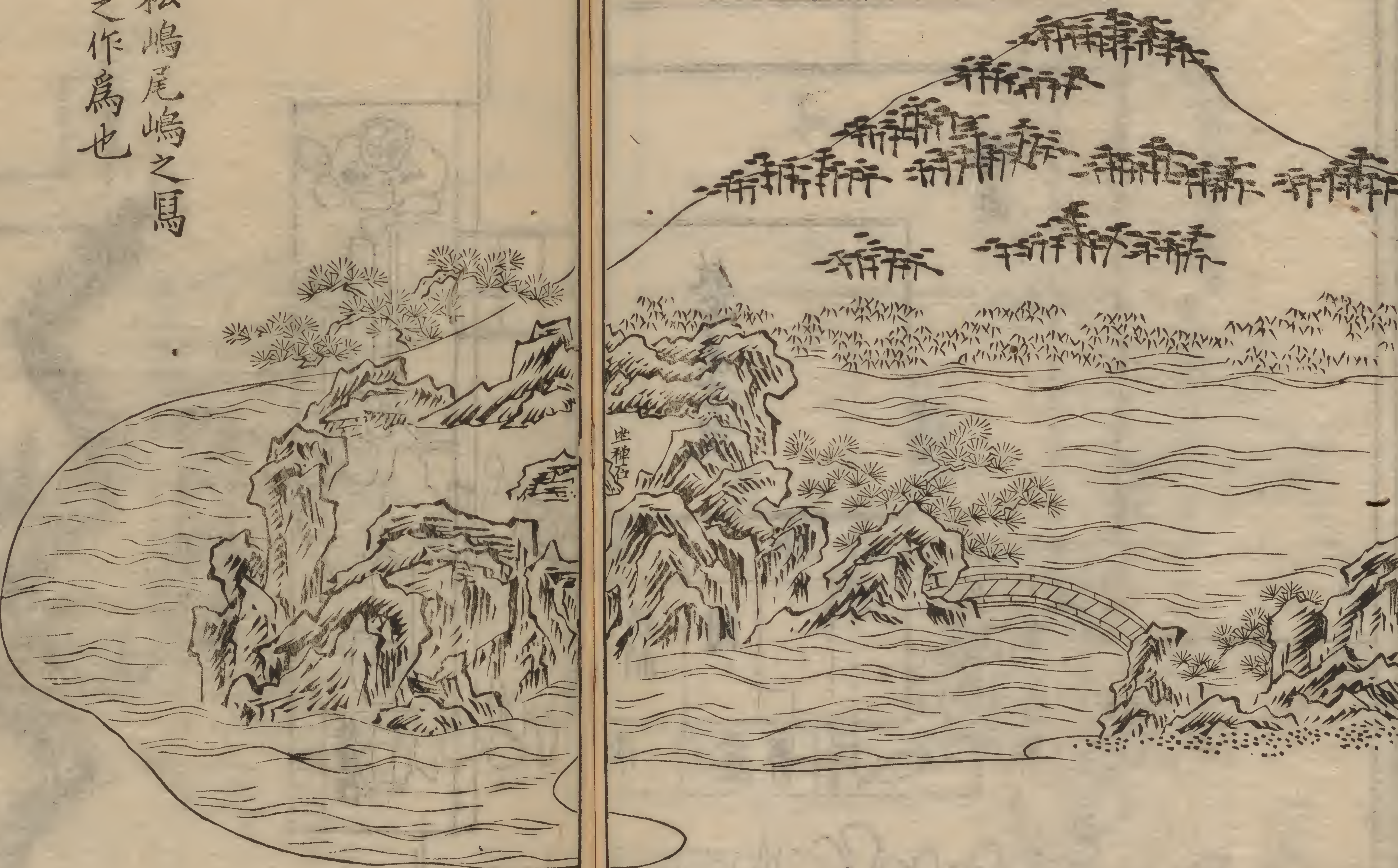
一柳氏南天平庭



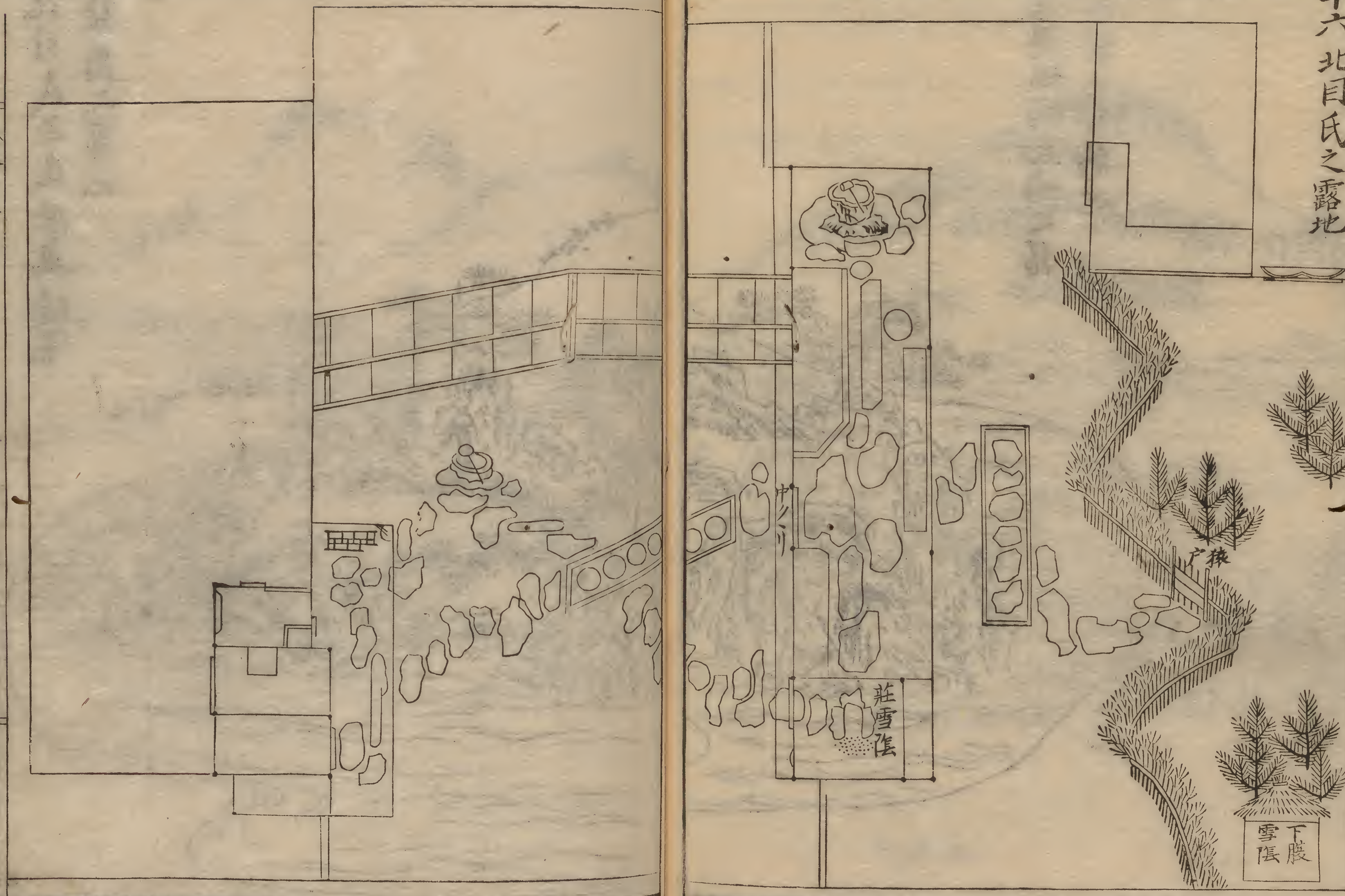
十五 堺町市住居露地數寄屋之圖



陸奥松嶋尾嶋之寫
利休之作爲也



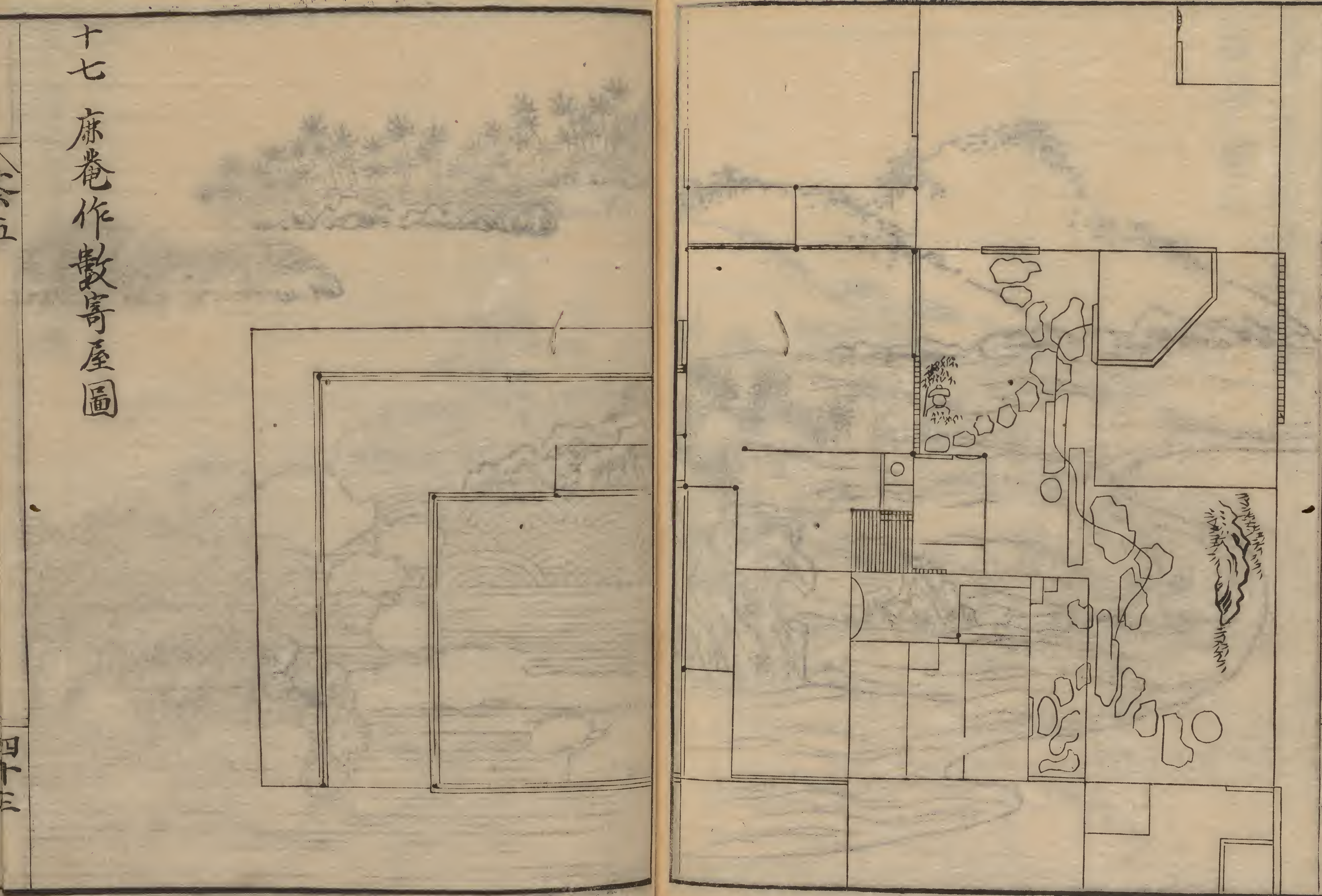
十六 北目氏之露地



北目氏之庭陸奥塩竈ノ籬島之寫也



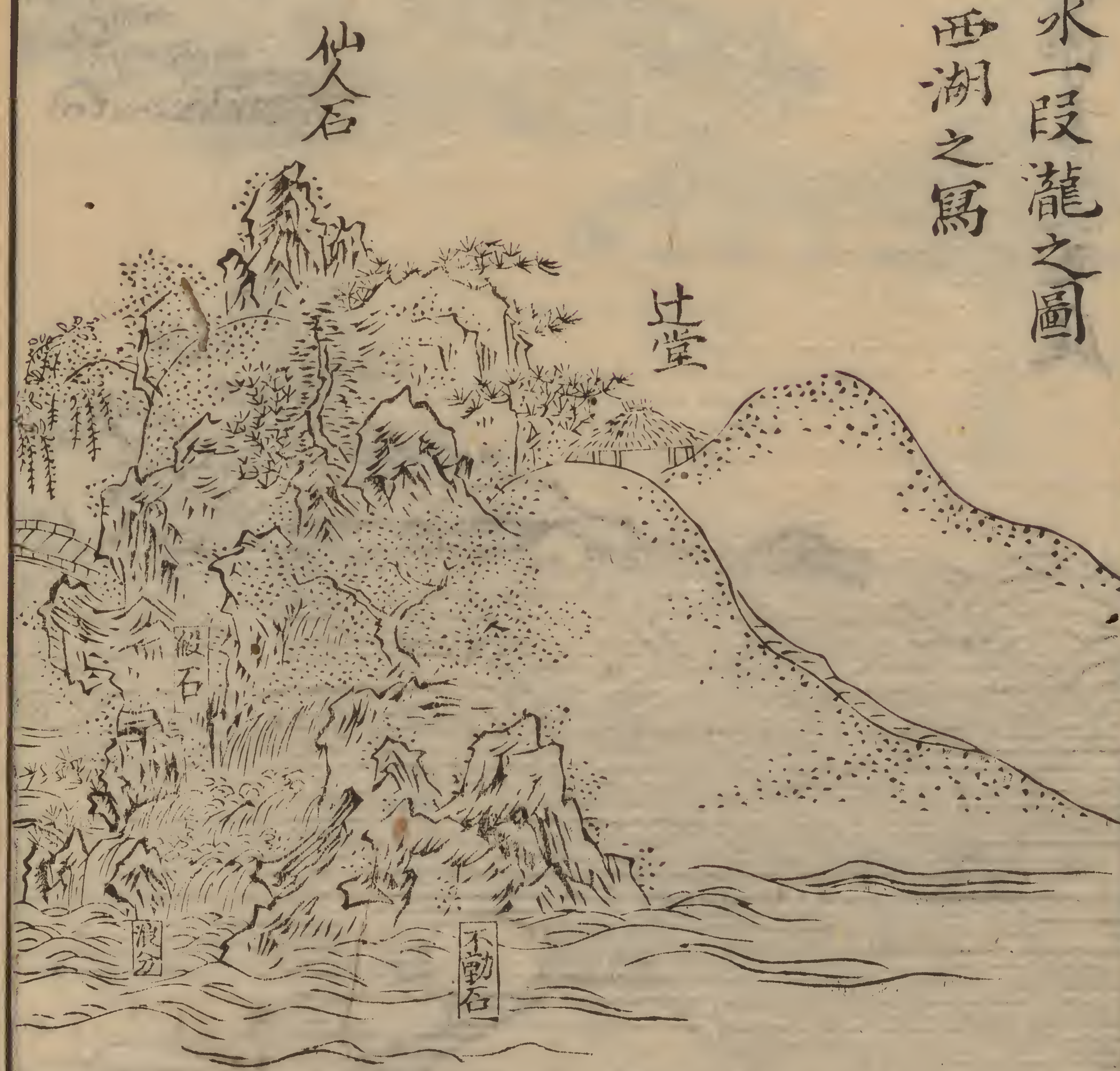
十七　康菴作數寄屋圖

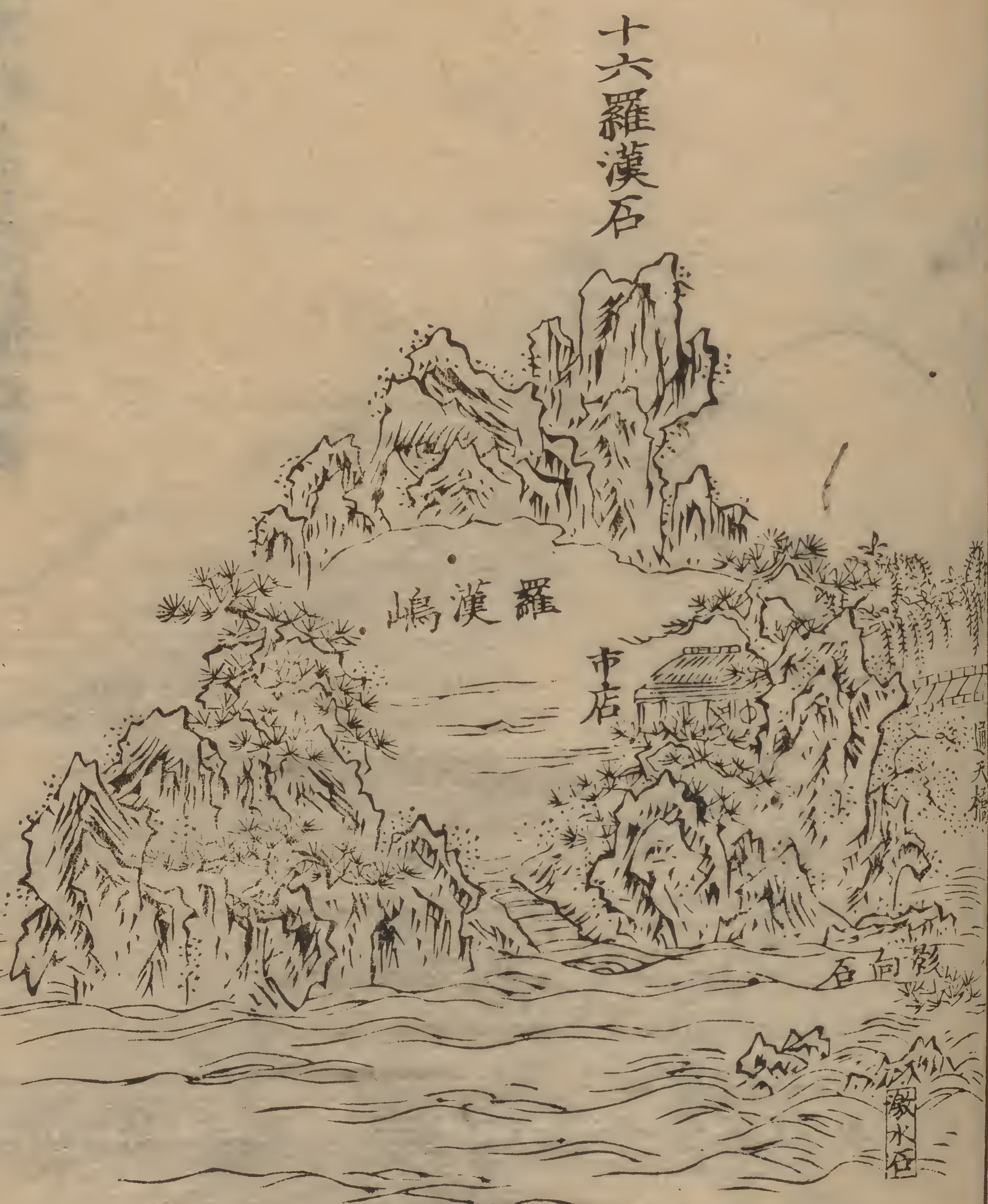


右鹿菴作書院之庭



玉澗樣山水一段瀧之圖
本式山水西湖之寫





玉澗様山水二段瀧之圖





玉澗様山水三段瀧圖



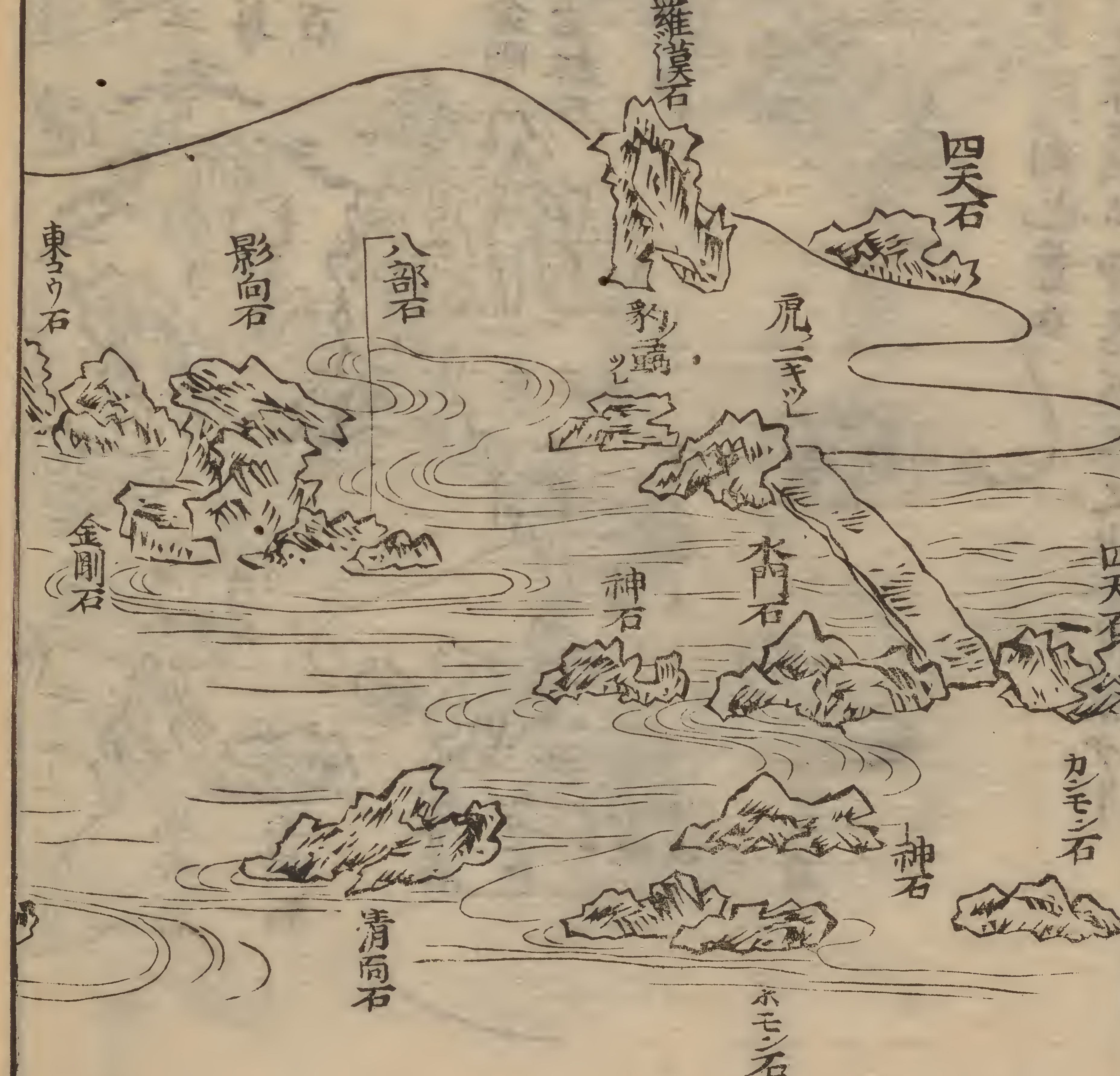




建仁寺内正傳庵之庭圖也昔日
織田有樂ニテ堺之珠慶法師名石尽之山水ヲ築ケリ



聖德太子南都法隆寺ニ納給フ圖或也





玉澗様山水一匠二匠三段瀧之図

一不動石　影向石　羅漢石　仙人石　三光石　抑異石　虎嘯石　獅子走　通天石　野額石　龍門石　釣臺石　盤石　浪分石　激水石　亀鶴石　是図予此　通天橋　瀧池橋　懸樋　陰陽之飛張　影向橋　鶺鴒橋　皆不肖定法記於此図也

一山神堂　辻堂　峠茶店　棘茶店　釣臺　此図在于此

一日天石　月天石　三光石　羅漢石　常人之庭可有遠慮　此外依尊卑之品　麒麟石　鳳凰水　桐林　此三品者猶以可有遠慮図亦秘之也

永禄年間

玉澗流末泉州堺珠慶坊撰之

一熟々茶道の事古昔より世に流布するの古抄有といへども深知すべし然るに後代茶の道とかく学ぶ者権勢に誇り淵源を後にして只茶人茶碗茶葉茶室の飾り是のみ茶人の器を撰ぶことを信じ茶をたて飲む事の外に躾記乱逆おほく不正勝劣和漢の質由来茶道に通ずる者ありても挙世知る事稀なりこれひとへに古人の書を好み廣く世事にかかはるゆゑ人は茶をよそに不限耳に觸心によりて或は積書に写し傳へなどせりここにおいて今にしると寄集めて旧跡古路地の図をとり数と故て押計文字代の利休織部遠州を世に茶湯ともてはやらしの遠風と語る茶道家に集めて茶の湯

一切の秘密を全く傳へんことを或は師友に捨て設

水田甚左衛門
吉岡伊兵衛 梓行